

女神のつくった世界の片隅で

従魔とゆるゆる 生きていきます

2



著 みやも

画 ぶし

CONTENTS

Juuma to yuruyuru
ikite
ikimasu

第1章

精霊と温泉

007

第2章

夜市と暗躍と

149

番外編

愛しい夕乙女

277



ジェイ

しんえん
『深淵の魔術師』と
呼ばれる転生者。
『黒魔導士』と『聖職者』の
二つの職業を持つ。

エルディナ

大地の精霊。
おっとりした性格だけど、
計算高いところもあり、
手強い。

シヴァ

ワイルドな獣人の転生者。
『剣聖獣王』と呼ばれるほど、
武に長けている。

てりたま

びちゅびちゅ鳴く雀。
おつちよこちよいけど
時折ミラクルを起こす!?

姫ちゃま

たまめつばち
珠蜜蜂の女王。
水の精霊の加護を受けて、
高貴な姿に。

ガチャ丸

まだ幼いが、種族は鬼。
ノエルの用心棒を務める。
大好物はお芋。

しーちゃん

本名は『猪王』。
熊より大きな
凍牙猪という種族だけど、
普段はちんまり
可愛い姿になっている。

ノエル

ハーフエルフに転生した、
本作の主人公。
手仕事や料理、調薬など、
『生産』が得意!

第 1 章

精霊と温泉



Juuma to yuruyuru
ikiteikimasu

はじまり 賑やかな箱庭

夜明けとともに、小鳥たちの賑やかなさえずりが祝祭の合唱のように響き渡った。

私——ノエルはいつものように軒先へハーブの束を吊るしながら、小屋へ目を向ける。最近そこに、小鳥が巣を作り始めたのだ。

藁や小枝を器用に運ぶその姿はたまらなく愛らしい。

それを少し離れたところから、そっと見守っている。

すると、私の肩の上でも同じように巣作りを見物している小鳥が一羽。

卵型のフォルムに艶々と照りのある羽、なぜか焼きたてのパンの香りがするその子は、愛すべき我が家のボンコツエース——従魔のてりたま。

てりたまは自分と同じ鳥に向けて、まるで珍しい生き物でも眺めるような目を向けていた。

「いやいや、あなたも鳥だから！」

思わず突っ込みが走る。

それなのに、当の本人は『え？』と首を傾げるものだから、思わず噴き出してしまった。

「うん、てりたまはずっとそのままできてね」

いつもの穏やかな朝。

季節は夏へと着実に歩を進めている。

従魔達に癒されながらしみじみと感じる幸せ。

実は、私は三年前まで、別の世界で生きていた。

それからこの世界《アストレイリア》に来た。

このアストレイリアは、私が毎日生きるように遊んでいた『女神の箱庭』という人気VRMMOの舞台だった。でもゲームのアストレイリアはなんと、宇宙のどこかに本当に実在するらしい惑星アストレイリアを模した、壮大な仮想世界だったの！

そして、ゲームの中でもとりわけ戦闘力が高い者がこの世界に転生させられる、というシステムだった。

というのもこの世界には『呪穴』——この星アストレイリアにかけられた邪神の呪いが存在している。それは、星を侵す異形の魔物を生み出す恐ろしい穴。

実際この間はフィオの森に呪穴の王・サイクロプスが出現して、転生者のシヴァさんとジェイさんがあっさりと討伐してくれたのよね。

もし彼等が来てくれなかったら……今頃この農場はどうなっていただろう。

……あ、そうそう、私は別に戦闘力が高い訳ではない。

家族同然の従魔と別れを惜しんでいたら、その姿が神様の目に留まって転生させてもらえた、という経緯がある。

私はキッチンで紅茶を啜り、平穏な朝が続くありがたさを囁みしめる。

明日からはアイステイーもいいかもしれない……そんなことを思いながら。

そろそろお店の開店準備をしなきゃ。

看板娘がすっかり板についたケイトさんが、今日も店先を掃きながら「おはようございます」と笑っている。

かつて、ケイトさんの旦那さんであるロニーさんが呪穴の元となる『呪い』の更に源泉である、『滲み』に侵されてしまった。

ロニーさんはそれによって住んでいた場所を追われ、やがて祖母であるイオナおばあちゃんに頼る。

私はそれまで、イオナおばあちゃんによくしてもらっていた。

だから、滲みの問題を解決した上で、お店で雇うことにしたのよね。

最近はいオナおばあちゃんと、ロニーさん夫婦が畑やお店を手伝ってくれるおかげで、私は安心して外出できるようになった。

以前では考えられなかったことだ。

人気の『お野菜スコーン』、そして、気温が上がるにつれよく売れる『虫除け軟膏』の補充を終えると、キッチンに戻り朝ごはんの支度をはじめ。

竈に火を入れてくれた、炎魚のウノ、寝坊助のドスとトレス。

そして畑帰りで泥だらけの小鬼のガチャ丸と凍牙猪の猪王ことしーちゃんも。

みんな、揃ってジュワワと脂が弾けるベーコンの香りに吸い寄せられてきた。

「ガチャ丸、みんな呼んできて」

私はベーコンから出た脂に卵を落としながら言った。

現れたのは拠点としていたカナンガラへ帰ったはずのシヴァさんとジェイさん、そして、バッカスさん。私と同じ転生三人組。

実はシヴァさんとジェイさんが帰る際にバッカスさんの分もって、お弁当を持たせたんだよね。

それを食べたバッカスさんが鬼神の勢いで『ゴーレム遺跡』を攻略し、最奥の精霊石を起動させたいの。

精霊石は別の精霊石があるところにワープできる機能を持っている。

で、私の家の近くの泉にある精霊石のところに移動してきて、今に至るというわけ。

さらに、なぜか、うちで毎日のように温泉を掘っている。

本人は『滞在費』だと言っているけれども……。

さすが、レベルキヤップを解放したドワーフ。

やるのが神話レベルで眩暈がしそう……。

確かに、みんな気兼ねなく入れるお風呂があったらいいよねとは言ったけど……。

規模ツ!!

もちろん、泉に棲む水の精霊タリサとも顔合わせ済みで、今ではすっかり仲良し。温泉掘りにも協力しているという噂まで……。

陽キャのコミュ力、怖いっ!!

さて、そんなことを考えながらそれぞれの前に、カリカリベーコン付き目玉焼きとご飯、お味噌汁を配膳する。

転生組からすると、こういう普通の朝ご飯がたまらなくいいらしい。

なんかそれ、すぐわかるよ。懐かしいよね。

こんな感じで食卓が賑わいはじめた時――

「ノエルや、塩くれんかの？」

「俺、醤油〜」

「……ケチャップ（ボソツ）」

「『ケチャップ!?』」

ジェイさんのケチャップ発言に思わず三人の声がハモってしまった。

目玉焼きにケチャップ派がいるとは聞いていたけど、実際にこの目で見るのは初めてだ。

ジェイさんは私達の驚きを気にするでもなく、ケチャップをトロトロの黄身に纏わせながら黙々と食べている。

相変わらず表情はないのだけど、口に運ぶそのスピードから、とても満足しているのがわかる。

ちなみに、私は醤油マヨ派。

隣のガチャ丸はそのまま派。

世界には色んな正義がある。

そこへ突然――

キッチンの水瓶からタリサがひよつこりと顔を出した。

「ねえ、みんな何食べてるの？ 私も食べたい!」

その登場方法だけはやめて欲しい。

水瓶に生首が浮いてるみたいに見えるから……。

そんなタリサに驚くでもなく「ウィッス」とか「よお」とか言っただけで受け入れているシヴァさん達もどなの!?

この人達、動じなさ過ぎて怖いっ!

タリサは「全部ノエルと一緒にいい」と言った。

つまり、目玉焼きには醤油マヨ。

ところが、バツカスさんに「はじめて食べるんじゃない? 醤油マヨはなあ……」と突っ込まれ、

結局全部の味を試すことに。

塩、醤油、ケチャップ、醤油マヨ。

そして、ちよつと出来心でウスターソースも並べてみた。

饒舌に評価しながら食べ進めていくタリサ。

そして最後の一品、ウスターソース。

ドキドキしながら見守っていると――

「これが一番美味しいじゃない!!」

新たな派閥爆誕。

まさかのラスボスはウスターソース。

全部食べ終えて水瓶へと満足そうに帰っていくタリサ。

……だから、そこから出入りするのやめなさいってば。

……なんだけど、騒がしくて、賑やかで。

こんな朝が最高に愛おしい……あれ? やっぱり私、タリサに毒されてる?

1 姫ちやまの誕生とスキル開発

みんなでワイワイと朝食を食べたら、私は王都へ。

今日は農業ギルドでとあるものを仕入れる予定。

ちなみに、ガチャ丸達はシヴァさん達とバスクオス力平原で特訓するんだとか。で、バツカスさんは今日も温泉づくり。

なので、私は一人王都へと向かう。

なんの用事かと言うと――

それは数日前の朝のこと。

いつものように夜明けとともに外へ出て、黙々と草を抜き、畝を整えていると、畑の脇の草花に蜜を求めて小さな虫達が飛び交っているのが見えた。

その時に、ふと思ったのだ。

「そう言えば、こっちの世界に来てから、蜂蜜はちみつを作っていないかったな」と。転生前、ゲームだった頃のハーブガーデンには、可愛らしい木製の養蜂箱ようほうげいが並んでいて……思い出していたら急に懐かしくなって、なんだか無性に、こちらでも養蜂を始めたくなってしまったのだ。

それに、蜂蜜があれば、料理やお菓子のレパートリーもぐんと広がるし、甘いものの好きのタリサのためにも、きつと役に立つ。

今の生活にびったりな気がする。本格的な感じじゃなくて、ご自宅用の、ちょっと生活に彩りを添える程度の蜂蜜づくり。

こういう風に思い付きではじめられるのがスローライフのいいところよね！

と、言うわけで早速出発。

うちから王都までは、徒歩でだいたい二時間。しかも、それなりに健康な大人の早足で、の話。だから今までは、夜明けと同時に家を飛び出して、王都で用事を詰め込んで、ギリギリ陽が落ちる前に帰宅、なんて弾丸ツアー状態が当たり前だった。

でも、今は違う。

文明の利器ならぬ精霊の恩恵。

便利な精霊石のおかげで、今じゃ人目につかない雑木林や草むらに『精霊の道』をびよん、とつなげてワープできる。

帰りも、誰にも見られないようにそつと隠れて再ワープ。

おかげで、王都への往復がびつくりするほど簡単になった。

……まあ、それでも買い物に行くと、毎回何かしら買い忘れるんだけどね。

そんなわけで、驚くほどスムーズに農業ギルドに到着。

ほんとタリサ様々だよ。

農業ギルドで受付をして、養蜂コーナーでお買い物を始めようとしたその時、聞き覚えのある声に呼び止められた。

振り返ると、ふうふうと小さく息を切らせながら、コロボックルみたいにふくふくとしたおじいちゃんおじいちゃんが、短い脚で一生懸命こちらに駆けてくる場所だった。

「あ、ギルド長！ お久しぶりです」

「やあやあ、元氣そうで何より。相変わらず、あなたの作物は評判がいいですよ」

ニコニコと目尻を下げて笑うその姿は、見ているだけで心が和む。

まんまるのほっぺと白くてふわふわな髭、ひととき大きな麦わら帽子。

そう、この人こそ農業ギルドのギルド長さん。
温厚で、朗らかで、ちよつと可愛い。

どこにいても『そこがほつとする空気』になる、不思議な人。

いつもは生産者たちの悩みや相談を聞いたり、流通の不具合を調整したり、時には王都のえらいお貴族様のところへ、のんびりした顔で乗り込んで交渉を纏めてしまったり。

実はとっても頼れるすごい人なのだけれど、そんな忙しい人が、わざわざ私を呼び止めた理由は――

「実はね。今年の『照陽祭』……夜市に、ぜひ出店してもらえないかと思ってね」
そう言って、いたずらっ子のようににつこり笑った。

言われて思い出した。

ネイブルナルの夏には、大切なお祭りがあつたんだ！

それが、照陽祭。

『太陽の力をもつとも強くなる日』とされる夏のだ真ん中、夕闇が迫ると街のあちこちで、ゆらゆらと灯りがともる。

もともとは、自然への感謝から生まれたお祭りが、時を経て夜通し行われる夜市として、定着したお祭りである。

『照陽祭の夜市に出店する』

それは、選ばれし者としてギルドの威信を担うことを意味し、本人にとつても大いなる誇りであり、また喜ばしい知らせでもある。

けれど同時に、それは『ギルドの看板』を背負うということ。

店の味、素材の質、装飾の美しさに至るまで、すべてが厳しい目で判断される。

だからこそ、選ばれた者は祝福されると同時に、心のどこかで肩にずしりとした重みを感じるのだ。

そんな榮譽あるお祭りにまさか私か！

私の顔を見たギルド長はふわふわな白い髭をゆつたりと撫でながらふんわりと笑い――

「返事は来週でもいいからね。前向きに考えてくれたら嬉しいな」

と言い置いて、また忙しそうにどこかへ走り去ってしまった。

その背中を見送りながら、ゲーム時代の照陽祭をふと思ひ出していた。

ゲーム時代の照陽祭って、生産職ブレイヤーの大・大・大イベントだったんだよね。

名のある錬金術師、伝説の裁縫師に、爆売れの細工師……とにかく各ジャンルの猛者たちが毎年火花を散らしてた。

私は参加しなかったのだったか？

出店？　するわけないじゃん！　私、ファーマーだよ！

ポーシオン屋さんの横で芋は売れません！

鍛冶師が武器防具叩いてる隣で、にんじん並べる勇氣はさすがにないわ。

というわけで、毎年専らお客さん側で楽しませてもらってました。

でもね、それがすごく楽しかったのよ!!

たとえば、金属製の重装より硬いと噂の布装備をドヤ顔で並べる裁縫師さんや『これ、誰がつけるの!?』って突っ込みたくなるような腰に巻くガチョウのアレを装飾品として売る細工師さんとか。

……ネタにしか見えないのに、実は性能ぶつ壊れてこともザラで、もうたちが悪いっただけ！

毎年、『プライドをとるか、性能をとるか』って悩む冒険者さんたちの姿が見られてね……。

後日、ぶつ壊れネタ装備で無双する動画がバズったりして、ほんとに楽しいイベントだったのよ！

もちろん、笑いをとるだけじゃなくて、実用品だってバッチリ揃ってたわ。

高性能ポーシオン、軽量武器、装飾品、日用品に家具まで——

ありとあらゆる『手仕事の粋』が一堂に会する、夢のような夜市！

まさに、生産職の……いや、ものづくりを愛する者たちの夢の祭典だったの。

ちなみにうちにある薬草入れの棚とか、調理台横のちっちゃいラックとか、私の革鎧とか、ゼーんぶそのとき買った『プレイヤーズメイド』品。

どれも見た目だけじゃなくて、性能も抜群なのよ。

見るたびに、『あー、あの時の夜市かあ』って、懐かしくなるんだよね。

(……そんな大舞台に私が……務まるんだろうか。でも……)

胸の奥が、ちよつとだけ踊っている自分がいた。

でもその前に、今日は目的の『養蜂セット』をちゃんと買って帰らなきゃ。

今から私が養蜂のために購入する珠蜜蜂はちよつと変わった蜂なのよね。

蜂蜜を作ってくれる存在ではあるけれど、私たちの世界にいた普通の蜜蜂とは、だいぶ性質が違うの。

だから、育て方も一筋縄じゃいかない。

蜂蜜は、珠蜜蜂との『物々交換』で手に入れるもの。

小さな蜜袋を差し出される代わりに、こちらは甘いご褒美を渡す——それがこの子たちの可愛いルールだ。

それに、蜂蜜を集めてくれるのは女王じゃなくて、働き蜂。

女王はただ、卵を生み出す役目。

でも不思議なことに、みんな生まれた時から交換の作法をちゃんと心得ている。

女王が遺伝子^{いでんし}かなんかに組み込むんだろうか？

問題は、女王が卵を産むための準備がちよっと大変なこと。

養蜂箱を温かくしたり、甘いものを切らさないようにしたり。

角砂糖^{かくざとう}なんて、庶民^{しよみん}には気軽に使えない品なのに。

高い理由？ そりゃそうよ。

甘い塊^{かたまり}を惜しまず与えるって、それだけでもう贅沢品^{ぜいたくひん}なんだから。

まあ私の場合、農家の特権で自前調達してるんだけどね……ふふん。

というわけで、今回は自宅用にワンセットだけお迎え。

帰るなりわくわくしながら、温度を保つ魔法を^{ほじし}施し、ハーブ精油を染^しみ込ませたコトTONを養蜂箱に敷^しき詰めた。

小さな命の準備は、これで完了。

それから幾日か経ち――

珠蜜蜂の女王様には、しばらく室内で優雅^{ゆうが}にお暮らしいただいている。

外じゃ何があるかわからないし、一匹きりじゃ害虫に襲^{おそ}われる危険もあるしね。せめて働き蜂が生まれるまでは、とそういうつもりでいたんだけど……。

「さて、姫ちやま。本日はどの甘味^{かんみ}を御所望^{ごしやもう}ですか？」

私は両手に豆皿^{まめざら}を三つ持ち、珠蜜蜂の女王の前にぺたんと正座。

「豆皿には角砂糖サイズにカットされた『石焼黄金芋^{いしやきこがねいも}』『甜菜糖^{てんさいとう}』『粒立アロエのコンポート^{つぶたち}』がそれぞれ盛られている。

姫ちやまは優雅な羽音を立てながら、一皿ずつチェックし、今日のお気に入りを選んで巣へと運んでいった。

……どうやら今日は粒立アロエのコンポートらしい。

最初は甜菜糖だけで育てるつもりだったのだけれど、ふと思い付きで本人にチョイスしてもらうスタイルを試してみた。

すると意外と日によって好みが変わることがわかり、それから楽しくなって色々試すようになってしまった。

今ではすっかり私のルーチンワークと化している。

しかも最近、胸まわりの産毛^{うぶげ}がやけにツヤツヤしてきて、なんだか感情も豊かになってきた気がする。

虫に感情なんて……と最初は思っていたけれど、餌付け^{えづけ}のせいか、今では私のあとをちょこちょこ飛んで回るほどに懐いてくれている。

唯一心配だったのが、虫も捕食対象に入っていたまの反応だったのだけれど……。

幸い、姫ちゃまに食指が向くことは一切なく、それどころか、私のあとをちょこちょこついて回る姫ちゃまに対して、『ぴちゅー!』と偉そうに声をかけている姿まで目撃された。

どうやら本人は自分ができたとも思っているらしい。堂々とした態度で空から指導(?)する姿が微笑ましいやら不安やら……。

そんな姫ちゃまというと、いまや立派に(?)お店番までしてくれるようになった。

主に観葉植物の上でくつろいでいるだけなんだけど、それでも十分目立つ。

……まあ、初めてのお客様は大抵ぎよつとするけどね。

でもこうして日々一緒に過ごしていると、虫だろうがなんだろうが、もうすっかり家族の一員。卵を産まないのがちよつと不思議ではあるけれど……おかしいな? ゲームで養蜂した時はジャンジャン卵産んでくれたんだけど……。

うん、でも、可愛いから、ヨシ!

そんなある日、いつものように従魔たちと一緒に、甘味の女神こと水の精霊・タリサの泉を訪れたときのこと。

「ん? なんか増えてるわね」

タリサが真つ先に姫ちゃまの存在に気付いた。

「今、蜂蜜作ろうと思つて育ててるの」

私は自慢するようにタリサに告げる。

ところが――

「へえー。でもその子じゃ多分、蜂蜜は作れないと思うわよ?」

今なんと?

私は驚愕し、固まった。

「……え? まさかオスだったとか!」

「バカね! 違うわよ! 半分モンスター化してんの!!」

脳が処理落ちして一瞬何を言われたのかわからなかった。

再起動するように数拍置いてやつと現実を呑み込む。

「は? ええー!」

どうりで妙に感情豊かだと思った。

でも虫がモンスター化するなんてことあるの!?

思いつき顔に疑問符が出ていたらしい……。

「あんだねえ、そんなことも知らないで育ててたわけ? はあ仕方ないわね。教えてあげるから早く甘味出さないよ」

呆れつつもちゃっかりスイーツは強請るタリサ。

口も態度も悪い彼女は、割と面倒見がよく、情に厚い性格をしていることが最近なんとなくわかってきた。

今も私に呆れながらもちゃんと教えようとしてくれているのがその証拠だ。

最初こそ喧嘩腰で近寄りがたかったけど、今じゃこのタリサとのお茶会が、私にとっても密かな楽しみになっている。

ピクニックシートを広げて、即席ティータイムの準備。

本日のスイーツは『クレープ』。

三角に折りたたんだクレープ生地、それぞれが好きなトッピングをのせて楽しむスタイル。

トッピングはハーブガーデン産『紫煙花』の宵闇を思わせる美しい色をした花シロップの他、菜園産『いちごジャム』、みんな大好き『シュガーバター』『粒立アロエのジャム』、そして『ホイップクリーム』の五種類。

私は紅茶を淹れる係。

泉からくんできた水のスリムポットに入れて、三脚にセット。

沸かし担当は、もちろんお手伝い大好きなウノちゃん。ドスに任せたら蓋が吹っ飛ばし、トレスだとポットが永遠にぬるい。

ちなみにこの泉の水、今ではすっかり『聖水』扱いである。

レアアイテムの『橋真珠』を沈めたからか、はたまた泉に棲み着いた水の精霊の影響か……おかげさまでそのまま飲めるし、料理や保存食にもそのまま使えるし、生水のままポーションのベースにもできるしで、大変助かっている。

紅茶を注ぎながら、みんなのクレープをチラ見してみる。

タリサは花シロップ＋ホイップ。ガチャ丸はいちごジャムどつさり。しーちゃんは何がいい？ いちごジャム＆アロエのダブルジャムね。

姫ちゃんも？ 花シロップね、了解！ スプーン一掬いを豆皿に。

私は安定のシュガーバター。これが一番、幸せを噛み締められる気がするんだよね。

「いただきますー！」

ほんのり温かいクレープに、バターのコクと砂糖の甘みがじんわり広がって……うん、今日も幸せ。

タリサも口元をゆるめながら、紅茶をひと口。

「さて、さっきの続きだけど、虫だってね、命あるものなら階位が上がれば進化するのよ」

「か、階位？」

「その生き物の『存在値』みたいなものね」

タリサのミニ講義によれば――

生きとし生けるものは全て存在値を持っており、その生き物の器を超え^こるくらいの存在値を獲得すると、生き物としての階位が上がって一つ上のステージへ進化するらしい。

じゃあなぜ姫ちゃまが進化しつつあるかっていうと……

「本来、虫って『個』じゃなくて自然の一部なのよ。それを、アンタが勝手に『姫ちゃま』なんて名付けて、甘味を選ばせて、しかもその甘味が魔力入り薬膳^{やぜん}だったせいで……」

要は、通常『個』という概念を持ち合わせていない虫を名付けして呼び、甘味選^{せん}びで意志を引き出し、更にはその甘味が薬膳や調薬スキルを駆使して作る魔力濃度の高い物だった。

そんないくつかの要素が重なり、結果、姫ちゃまは『個』としての自我を持ち始め、階位を超えかけているのだとか。

進化のトリガー、まさかの甘味。

内心ドキドキしていると、タリサが姫ちゃまのそばへ行き、さつと手を翳^{かき}した。

夢中で花シロップを吸っていた姫ちゃまの身体が、ほんのりと光り出し……。

(……あれ？　でかくなってるない!?)

ライターサイズだった姫ちゃまが、まさかのマグカップサイズに。

しかも、複眼^{ふくがん}はラピスラズリのように美しく輝^{かが}き、脚にはツンと尖^{とが}った爪を装備。もちろん、お

尻^はの針^{はり}も鋭^すく、爪も針も瞳とお揃いのラピスラズリ色。

まるで宝石の靴^{くつ}下を履^はいているように美しい。

胸の産毛も爆発的に毛量を増し、まるで毛皮マフラーを纏^{まと}っているよう。

なんとも高貴なお姿に変身あそばされた。

明らかに『階位が上がった』と思わせる瞬間だった。

その変化を見てタリサは満足したように、

「加護を授けたわ」

とこともなげに言い放った。

「えっ!?　加護おおー!?」

驚きのあまり、紅茶を嘔^{おう}き出しそうになる。

「だって、蜂蜜ほしいでしょ？　この子に蜂を統率^{とうそつ}させればいいじゃない」

……どこまでも甘味にストイックな精霊である。

加護を得て一気に階位が上がった姫ちゃまは、どうやらそのまま私の従魔になったらしい。

今までの『なんとなく通じてる?』という感覚が、今やはっきりした『感情の波』として伝わってくる。

ガチャ丸たちも新たな家族に大はしゃぎ。



「ギャッギャ」「フゴフゴ」「ぴちゅー」「くくく」「ギチギチ」と、お互い自己紹介しているようだ。

名前はもちろん、今さら変えられないよ……。

『姫ちゃま』で確定。

いや、仮に改名できても、私のネーミングセンスではたかが知れていたし……。

今度から、軽率に虫や動物に名前を付けるのは気を付けようって心に誓ったのだった。

その後、わが家の農場でも遂に蜂蜜の生産がはじまった。

「蜂蜜まだー？ 蜂蜜まだー？」

朝から晩まで耳元で囁いてくるタリサの圧に根負けして、姫ちゃまに加護をもらったその日のうちに農業ギルドへ赴き、追加の女王珠蜜蜂を三匹お迎えしてきたのだ。

姫ちゃまは三匹の新入りを、すぐさま掌握した。

あれこれと世話を焼き、おしとやかに指導する姿は、どこか誇らしげで、どこか楽しそうでもある。

私かというと、うっかりまた進化のトリガーを引いてしまいそうだったので、餌作りだけを担当し、あとはぜーんぶ姫ちゃまにお任せすることにした。

その判断は、どうやら正解だったらしい。

今回の女王たちの専用ごはんは、姫ちゃまが自らくると羽ばたきながら選んでくれたもの。

一匹目は**甜菜糖**。二匹目は、姫ちゃまもお気に入りの紫煙花の花シロップ。そして三匹目は……

まさかの、ホイップクリーム。

動物性ってアリなの!? と心配にもなったけれど、見事全員、艶々の卵を産んでくれた。

そして生まれた働き蜂たちがまた、個性豊かで驚かされる。

甜菜糖で育った子たちは、ゲームで見覚えのある、標準的な**珠蜜蜂**。

花シロップ育ちの子たちは、羽根がほんのり紫がかって、体もスラリとスリム。

……そして、ホイップクリーム育ちの子たちはというと、ごつい。妙にがっしり。

顎が太くて、羽音も低めで、なんなら肩がいかつい。

蜂なのにマツチヨ感がすごい。たくましい。

この多彩な蜂たちを、姫ちゃまは実に見事に配置した。

ホイップ育ちの子たちは巣箱の出入口を守るガードマン。

花シロップ組は、女王様の身の回りを世話しつつ警護する近衛蜂。

そして甜菜糖育ちは蜂蜜作りに全集中。数も多くて、巣の中は賑やかそのもの。

思わぬことに、女王の食べた甘味によって、働き蜂の姿や役割が変わるらしい。

これって、すごい新発見じゃない?

珠蜜蜂出身の姫ちゃまだからこそできたことだよな。

自然界でも、ひよつとしたらこんなふうに、女王が生き抜くための兵隊を、自然の甘味の力で生み分けているのかも……なんて想像すると、ちよつとワクワクしてしまう。

農業も、養蜂も、どれだけ経験を積んでも、ふとした瞬間に知らない扉が開く。

自然はいつだって、私たちの想像を軽々と超えてくる。

だからこそ、この暮らしはやめられない。

汗ばむ日差しの中、養蜂箱の前でしゃがみこみながら、私は甜菜糖で交換してもらった艶々の蜂蜜が入った『蜜袋』を両手に持って、幸せを囁みしめた。

つくった蜂蜜は三種類。

姫ちゃまにお願いして、それぞれの巣箱で、それぞれ違う蜂蜜を作ってもらったのだ。

一つ目は、いわゆる『百花蜜』。

これは季節の花々を自由気ままに巡った働き蜂たちが、あちこちの花から少しずつ集めて作る、いわばお花のブレンドハニー。

どの花が咲いているかで味わいが変わる百花蜜は、まさに『季節の移ろい』をそのまま閉じ込めたような存在だ。

スコーンに塗^ぬっても、紅茶に溶^とかしても、どんな朝にも似合う味。量も一番多い。

二つ目は、初めての試みとなる『単花蜜^{たんかみつ}』。

これは、特定の花だけでつくる、まっすぐな花の味を凝縮^{ぎようしゆく}した蜂蜜。姫ちやまが、珠蜜蜂を統率^{とうすう}してくれるからこそできる特別な蜂蜜なのだ。

今回は『剣陽花^{けんやうかう}』という名前のグラジオラスに似た花と、繊細^{せんさい}で光を通すほどに薄く、恥じらうようなピンク色の花弁^{かべん}が特徴的な『夕乙女^{ゆせつおんな}』という花の二つの単花蜜^{たんかみつ}をそれぞれ作ってもらった。どちらもネイブルナルの仲夏^{ちゅうか}を代表する特徴的な花だ。

今日は時間がないので、単花蜜の交換はまた今度。

取り敢^あえず、首を長くして待ってほしいそうなりサの元にノエル農場初採取の百花蜜を持って行かなくちゃ。

瓶詰^{びんづつ}にした百花蜜を抱えて泉へ向かうと、すでにその気配を察知したのか、水面がぼちゃんと揺れた。

おそろくたりサが、甘味センサーを働かせてスタンバイしているのだろう。

泉に差しかかると、案^{あん}の定^{じよう}……

「遂に蜂蜜が採^とれたのねーっ!!」

ばしゃーん!

水しぶきとともに飛び出したたりサが、すさまじい勢いで私に飛びついてきた。

精霊らしからぬ威厳^{いげん}ゼロのハイテンション。

どれだけ楽しみにしていたのよ。

「はいはい、ちゃんとするよ」と、私は苦笑しながら百花蜜の瓶をそつと手渡した。

姫ちやまに加護をもらったあの日、私は心に決めていたのだ。最初に採れた百花蜜は、全部たりサに贈^{おく}るって。

「姫ちやま、よくやったわー! ノエル大好きー!」

ぎゅーっと私に抱きついてきたたりサは、そのまま瓶に頬ずりして陶醉^{たうずい}の表情。

このボンコツ美人が水の精霊って、もう設定ぶつ飛び過ぎでしょ。

でも、案外この世界の『偉大なる存在』って、見た目に反して俗^{ぞく}っぽいかもしれない。甘味に目がないところとか特に。

たりサしかサンプルがいらないから断言はできないけれど、蜂蜜で指をベタベタにしている彼女を見ていると、ロマンが一つ剥^はがれ落ちる気分になる。

まあ……いいんだけどね。

そういうとこ、嫌いじゃないよ。

そんなご機嫌のタリサに手を振って泉を後にしたら、今日のメインと言ってもいい作業に取り掛かる。

それは『姫ちやまのスキル開発』！

蜂蜜の生産でたまった経験値を使って、姫ちやまをある程度強化しておきたいのだ。

何気にうちの従魔は高レベルモンスターばかり。

てりたまという例外はいるけれども、毎年、夏にお世話になっている密林地帯『グランルフロ』での採取はフィールドレベル自体が高い。今の姫ちやまをそのまま連れて行くのはちょっと心配なのよね。

私がティムするモンスターはゲームの設定が引き継がれるらしく、姫ちやまのスキルツリーもちゃんと見られるし触れる。

同じティマーのアンジーさんからは『スキルツリー』といった単語も、それに近い言葉も聞いたことがないから、多分、私だけの特殊能力なんだろうとは思う。

だからこそ、藪蛇やぶへびにならないようにあまり大っぴらにはしていない。

モンスターは『経験値』でレベルが上がり『魔石』でスキルを開発できるようになっている。

経験値はHPやMP、攻撃力や防御力といったステータスに影響を及ぼす。

たとえば大量の魔石でスキルだけ大量解放しても、それに伴ったステータスがなければ、せっかく

く解放したスキルが使えないということも起こり得る。

幸い姫ちやまは加護持ちの特殊個体で成長が早いと言うこともあり、十分にスキル開発できるステータスになっていた。

姫ちやまの種族名は『月爪蜂ルナティツクネイビ』。そして、既にその種族の女王に達している。さすがタリサの加護進化。

あと、特殊個体だからなのか、初期スキルも多い。その上、独特なスキルツリーを形成しているのよね……。

本人の資質なのか『連射スキル』も多い気が……。

スキルツリーって、ホントその子の個性が出るのよ！

ガチャ丸なんて農業系スキルの『収量アップ』の派生に『芋倍化』があったんだから。あんただんだけ……って思ったもんよ。

もちろん解放しましたけど。

で、姫ちやまの話に戻るけど、彼女の場合は初期スキルの『爪斬つめきり』『毒・麻痺針まひばり』『水魔法』、そして『蜂を従える能力』、それらがそれぞれに枝葉えだはを伸ばしている感じのスキルツリーになってるみたい。

爪斬派生の物理方面、毒・麻痺針派生の状態異常方面、それから水魔法方面と従蜂派生の自然

方面。

その中で、私がすぐにでも欲しいのがいくつかある。

まず物理方面の『六角盾』。

姬ちやまの安全のために早急に獲得したい。

そして、六角盾ハニカシールドを取得したら派生で物理ダメージが大幅軽減できる『強甲殻きょうこうかく』が解放されるので、それもすぐに獲得したい。

とにかく、姬ちやまの安全性を高めることが最優先。これは決まり。

次に自然方面の従数UP獲得で解放される『寒耐性』とその先の『從蜂寒耐性』。

これは冬に備えて絶対欲しい。虫も虫型モンスターも寒さにとても弱いから。

それに從蜂寒耐性は獲得すれば冬場でも蜂蜜を作ってくれるはず。そして雪百合スノーリリイの蜂蜜とか作ってみたいの！

上位スキルだから魔石足りるか心配だけでも……。

あと、獲得したら姬ちやまが絶対喜びそうなのが状態異常方面の『針弾ニードルショット』から派生する最上位スキルの『針連射ニードルドンク』。それから物理方面で爪斬最上位の『爪連撃』。

全部揃ったら水魔法・針・物理」の三方向からトリガーハッピーになれちゃうハッピーセット。

狂喜乱舞きやうきらんぶする姬ちやまの顔が、って言うか、感情が目に浮かぶようだ……。まだ獲得できない

けれども。

他にも姬ちやまのスキルツリーには珍しいものや不穏なものがとても多い。

やっぱ特殊個体だからかな？

うちの子の中では一番ツリーの枝葉が多いのよね。

その中で珍しいものと言ったら水魔法と状態異常の両方を伸ばしていくと獲得できる支援系魔法群。

支援系スキルはウノが『火属性バフ』だったり熱を吸い取る『吸熱』だったりをちよこつと持っているけど、姬ちやまほど大量に支援系スキルが出てきたのは私にとっては初めてのこと。

例えば『霧治癒フイグヒール』は残留型のリジェネだし、『霧鈍足フイグスロウ』はフィールド型のデバフだし、こういうタイプの支援系魔法は結構珍しいと思うのよ。

少なくとも他の子にはないスキル。

で、不穏なのが麻痺を伸ばすと最終的に『石化』が、毒を伸ばすと『即死毒』が、支援系デバフを伸ばすと『霧混乱フイグカオス』が最高到達点になってるってところ。

私はこの子の行く末がとても心配です。育て方間違わないように気を付けなきゃ。少なくとも善悪の判断はつくように。

うちの中で一番小柄なのに一番エグイのよ。

タリサの加護大丈夫？ 仕事してる？

それともタリサの加護が悪さしてるのかしら？

ともかく、この子が他人を無闇に傷付けることがないよう、気を引き締めて育てなきゃと思ってる。

そんなことを考えながらスキルをポチポチ解放している間にも私へ送られてくる強い思念……

【これ 欲 し い】

……根負けしました。

せめて六角大盾までは獲得しなかったけど、それを諦めて姬ちやまの強い強い希望で針弾を解放したよ。ちなみにこれを伸ばせば最上位スキルで解放されるのが針連射。姫ちやまはそこを目指したいそうです。

ダメだ……。

この子の将来はトリガーハッピーが確定している……。

ぐぬぬ……。

今回、私の手元にある中、上位魔石のほぼ全てを使って解放したのは――

中級スキルの六角盾、派生上位スキルの強甲殻。

中級スキルの従数UP、上位スキルの寒耐性、最上位スキルの従蜂寒耐性。

そして中級スキルの針弾。

さすがに魔法と支援系にまで手は伸ばせなかったから、今後に期待ということ。

っていうか、ガチャ丸達もまだ解放できてないスキルがあるからな。それも追々していきたいよね。

引きこもりのファーマーだからいつになるかわからないけどさ。

2 エルディナさんとの出会い

そういえば――蜂蜜用に新たに珠蜜蜂を買いに行った時のこと。

偶然、農業ギルドのギルド長とばったり会って、照陽祭の夜市へ出店したい、と意向を伝えておいた。

イオナおばあちゃん達とも真剣に話し合って決めたの。

こんな大舞台の機会、二度と巡ってこないかもしれないから。

そして今日。

夜市に向けたとある準備のため、私はグランルフォラへ向かうことにした。

お供は、最近シヴァさん達との修業の成果を試したくてうずうずしている、うちの従魔たち。そして、暇を持て余していたので強制的に参戦のシヴァ&ジェイの最強コンビ。みんなでタリサの泉から精霊の道を通って、ぽんっ。

あつという間に、フィオの森を抜けた先――

バルバン山脈の麓に広がる原生密林、グランルフォラへ到着。

巨大な樹々、蒸気のように漂う湿気、多種多様な生物が跋扈する密林エリア。

ゲーム時代の難易度は中級。

ガチャ丸達と一緒に、私でも安全に散策できる場所のひとつだ。

「うひょー、懐かしいなあー！」

シヴァさんが土を踏みしめたその瞬間――

しーちゃんが巨大化したかと思えば猛然と走り出し、ガチャ丸が反射的にその背に飛び乗った。

可愛い姿をしているしーちゃんだけど、本来は大きい猪。

有事の際には元の姿に戻るのよね。

こういう時は大抵、何かが起きる。

彼らの聴覚・嗅覚は人の何百倍も鋭い。ゲームではない現実のこの世界で、私は何度その感覚に

命を救われたことか。

私も即座に身体強化を発動。

運動音痴でも、真つすぐ走るくらいできるんだから！

肩に乗ったてりたまが、ぎゅっと力を込める。

ウノ・ドス・トレスは警護陣形を取り、姫ちゃまは肩から頭へ移動して固定砲台モードへ。

弓を引く邪魔にもならないし、頼もしいけれども、絵面がちよっと……。

そんなこと気にしている場合じゃないってわかってるけどさ……。ちよっと私、間抜けに見えな
いかしら？

それにしても一度走り出したしーちゃんはやはり早い。

問題は……私だけしーちゃんのスピードに全然追いつけないところ。

シヴァさん達は散歩くらいの余裕で付いて行ってるのに……。ぐぬぬ。

猪のトップスピードは時速五十キロメートル。

しーちゃんも例外ではなく、その巨体で風を切る！

そして背に乗るガチャ丸は――

高く跳躍！

鎌首をもたげていた巨大カマキリ・キラマンティスの頭にトンファーを叩き込んだ！

ここ、グランルフォラのモンスターは全部デカイのだ。
キラマンティスは頭を陥没させ、地に崩れ落ちる。
けれど、しーちゃんはその死体に目もくれず走り続け――
急停止！

「フゴアアーッ!!」

牙を剥き『威圧』を発動。

地鳴りする咆哮に、耳を押さえながら駆け抜けたのは――

「アンジーさん！ クイール君！ ……リアムさんまで！」

アンジーさんとリアムさんは、うちの常連さんの冒険者。

そしてクイールくんは、アンジーさんの従魔の飛翔猫だ。

三人を追っていた密林狼達は硬直し、ほどなく尻尾を丸めて逃げていった。

ふう、と白い氷の息を吐きながら踵を返すしーちゃん。

こういう時のしーちゃんは本当にかっこいいのよね。

「助かったよ。ありがとう」

肩で息をしながらリアムさんがお礼を言う。

「お前達ならあれくらいどうにかできただろう？」

とシヴァさん。

「まあ、そうなんだが、今日は『調査』が目的だったからね。血の匂いで他を刺激したくなかったんだ」

リアムさんが眉を八の字にする。

最近、うちの子とシヴァさん達の訓練に参加しているらしいと聞いていたけど、それはどうやら本当みたいね。

すっかりシヴァさん達との距離が近くなっているようだ。

聞けば、冒険者ギルドから狼系モンスターの生態調査依頼を受けていたとのこと。

街道沿いでの襲撃事件が急増しており、狼系全般の生息域が変化している可能性があるらしい。

「お前らも大変だなあ！」

シヴァさんがカラカラ笑う。

私はせっかくだから一緒に進むことを提案。

リアムさん達も喜んで同行してくれた。

さて、本来の目的地へ。

「ところで、ノエル達は何をしに？」

とアンジーさん。

「私達は、夏藍葉の採取に来たんです！」

「夏藍葉……？」

無理もない。

危険地帯へ『草むしり』に来る物好きは、きつと私だけ。

でも、この葉にはその価値があるの！

しなやかで光沢のある濃緑色の細長い葉。

夏にしか採れない貴重な植物で、染料になるのだけど……真価はそこじゃない。

乾燥させてすり潰した夏藍葉は、真夏の太陽光の下で煮出すことで、まるで夏空を閉じ込めたかのような鮮やかなターコイズブルーへと変化する。

しかも、日差しが強ければ強いほど、その発色が増していく。

更に、この葉は、熱と湿度を風の魔力へと変換する特性を持っていて、身に纏うだけで夏の暑さから体を守ってくれる、という驚くべき『ひんやり効果』を発揮するのよ！

その布で眠れば、まるで海に抱かれているみたいな心地よさ。

エアコンなんて比較にならない夢見心地よ。

今年は夜市にも出るし、熱中症対策のマストアイテム。

ただしその効果は夏の間だけ。

だからこそ、毎年奥地まで採りに来る価値があるというわけ。

ちなみに、この夏藍葉、もう一つ嬉しい機能があるわ。

それは、ライムにシナモンを混ぜたような爽やかな香氣。

気分をより爽快にしてくれるだけでなく、防虫効果も抜群で、葉っぱを数枚乾燥させて枕やシーツの下に敷くだけでも効果を発揮する。

染めたものには及ばないまでも、簡易的な防虫ならこれだけでも十分なくらい。

私はアンジーさんに早口で説明してしまった。

しょうがない、好きなものって語っちゃうよね。

その間も、

姬ちゃまは巨大芋虫・ジャイアントキャタピラーを蜂の巣に。

ドスは恐竜のような巨鳥・ジャックバードの頭を吹き飛ばす。

クイル君は真っ赤な巨大蛇・レッドサーペントを叩き落とす。

……と、戦闘が常時開催中。

ちよつとハッスルし過ぎじゃない？

修業の成果、もう十分に確認できたよ？

シヴァさんは苦笑い、ジェイさんは無表情のまま見守っている。

とは言え、今年は魔蜘蛛^{まぐも}に出くわさないだけ、まだマシ。

あれ、子分蜘蛛がほんとと面倒なのよ……。

そうこうしていると、密林の奥から『ダシン、ダシン』と地面を揺らす足音が近付いてきた。
(えっ……笛^{ふえ}なんて吹いていないのに!?)

耳に覚えのあるこの規則的な重低音。

間違いない。グランルフォラの主、巨大ゴリラ型モンスター『ンババ』だ。

しかし、呑気^{のんき}なのは私とうちの子だけ。

アンジーさんもリアムさんも、即座に武器へと手をかける。

シヴァさんまで表情を引き締め、敵を見据えて陣形を整えた。

巨大な植物をぐいと押しのけ、複数のンババが姿を現した瞬間――

私は慌ててみんなとンババの間へ飛び出し、両手を広げる。

「大丈夫！ 敵じゃないから！」

群れのボスンババは、張りつめた空気をものともせず、まっすぐ私の元へ。

そして自分の肩を、ごつい指でトン、と指し示す。

そこには、あの時助けた、小さな子ンババの姿が！

銀色のパヤ毛がモヒカンみたいに立って、キラキラした目でこちらを見ている。

すっかり元気になって！

……うわ、首を傾^{かし}げて手を伸ばしてきた、何この可愛い生き物。

みんなの緊張をよそに、私の胸の奥はじんわりと温かくなった。



私とンババの会いは、一年前に遡^{さかのぼ}る。

同じく夏藍葉^{カランヨウ}の採取でこの密林へ来ていた時、偶然鉢合わせしたのが始まりだった。

最初はお互い緊張した。

でも彼らは状況を冷静に見極め、無闇に襲ってこなかったの。

(あれ……この子たち、すごく頭がいい?)

そう思ったら、試してみずにはいられなかった。

『物々交換しない?』と必死にジェスチャーを送ると……

なんと通じてしまったのだ！

その時、インベントリに入れたてた手作りのクッキーやビスケット、スコーンを全部渡したら、グランルフォラのレア果実『バ・ナーヌ』と交換してくれたの。四房^{よふ}も。

私の腕と同じ太さのバナナっぽい果物で、力を引き出す効果のある高級素材。
嬉しくてびよんびよん跳ねたら、それが安心材料になったのか、ンババは私を奥へ連れて行きたくるような素振りを見せた。

ンババと一緒に密林を進むことしばらく、木々が壁と天井になった隔絶された空間に出た。
中は苔むした石畳と蔦の絡まる支柱、奥には苔に覆われた像——どう見ても何かの遺跡だった。
その中心に、なんと超絶レア植物『慈母の木』が！

それはエクストラポーションの材料になる『慈母の実』が採れる幻の植物。

（まさか、こんな場所にあるなんて……！）

感動していると、ンババが更に奥へと促す。

そこには、赤ちゃんンババを抱きかかえる母の姿。

でも赤ちゃんはぐったりとしたまま動かない。

鑑定したら『猛毒』。足には蛇の牙痕。

散らばる慈母の実が、唯一命を繋いでいるのだと気付いた。

私は迷わなかった。

即座に解毒薬を飲ませ、傷口に軟膏を。

しばらくして赤ちゃんは、すやすやと穏やかな寝息を立て始めた。

その時、お母さんンババが私を見た。

言葉はないけれど、はつきりと伝わってきた。

「助けてくれて、ありがとう」

——そんな気がした。

それからというもの、私が笛を吹くと、ンババは姿を見せて物々交換をするように。
不思議で、でも、とてもあったかい関係が続いている。



ところが、今日は笛も吹いていないのにンババが私の元に現れたので何事かと思ったら、あの時、治療した赤ちゃんを見せに来たのね。

生まれたてだったあの子が、今はもうパパの肩の上で堂々とドラミングを披露している。

まだ声変わりしていないせいで本来なら「ホワッホワッ」と甲高く響く声が『キャワツキャワツ』にしか聞こえない。可愛いが過ぎる。

ひとしきりパフォーマンズして満足すると、よいしょ、よいしょとパパから降りてきて、小さな腕を広げ——